2026年6月7日　日本人口学会高校生ポスターセッション

子育て中の人がサードプレイスに求めるものは何か

お茶の水女子大学附属高等学校3年　佐藤楓夏　沖桃花　林暁静　富坂美月

1. 課題設定・研究の意義

子育てをする母親の生活感情は、社会との関わりの有無や、子育て以外に生きがいを感じられるものがあるかどうかによって左右され、特に専業主婦の場合、生活感情が低くなりやすいことが分かっている(※1)。子育てをする母親にとって、自分らしく過ごすことのできる居場所の存在は、生活感情の向上に良い影響を与えると考えられる。本研究は、子育て中の人々にとって「居心地が良い」と感じられる場所には、どのような要素が求められているのかを明らかにすることを目的とする。

研究を進めるにあたり、家庭でも職場でもない、日常生活の中で安心して過ごせる居場所に注目した。特に本研究では、専業で子育て中の人を主な対象として、彼女らがそのような居場所に求める条件と、一般的に想定されている「居心地の良い場所(サードプレイス)」の要素との間に違いがあるのかを検討するというテーマを設定した。

これらを明らかにすることが、将来的に子育てをする親の生活感情を高めるような居場所づくりに活かせると考えられる。なお、父親や両親の子育てに関する感情についての先行研究が少なかったため、本研究では母親に注目した。子育ては母親のみが担うべきであるという考えに基づくものではないことを付記する。

2. 先行研究

(サードプレイス) ※1

1989年に米国の社会学者レイ・オルデンバーグが提唱。ファーストプレイス(家庭)、生活を維持するために必要で義務や責任が伴うセカンドプレイス(学校、職場)以外の居心地がいい場所と定義されている。「中立の領域」「人を平等にする」「会話が主な活動」「利用しやすさと便宜」「常連の存在」「目立たない存在である」「遊び心のある雰囲気」「もう一つの我が家」という8つの要素を持つ。その場が利用者に与える恩恵は、「目新しさ」「人生観」「心の強壮剤」「ひとまとまりの友人たち」の4つである。また、サードプレイスは、はじめからそれを目的として造られたのでは無い場所で生まれる。

(居場所感尺度) ※3

母親の居場所感の安定した下位概念は、「安心感」「役割感」「受容感」である。また、家庭における居場所感が社会における居場所感に影響を及ぼすことが示されている。

(アイデンティティ) ※4

子育て中の女性のアイデンティティは母親の役割だけでは支えられず、「個として生きる」という志向が強まっているとされ、「達成・評価」「交友関係」「生き方」「仕事」はその志向と強い相関が認められた。特に「達成・評価」がその志向の根幹にあるのは、「達成・評価」が「妻・母親以外の生き方」や「仕事」によって得られると考えられる傾向にあるからだと示唆されている。

(多重な役割・達成感) ※5

従事する役割(就業者、妻、母)が多いほど母親の生活満足感が上がること、また、各役割での達成感が高いと生活満足感が高くなることが示された。

先行研究より、居場所感の要素の一つに役割感がある。また、母親の「個として生きる」(アイデンティティ)の志向の根幹には「達成・評価」がある。それらは、「妻・母親以外の生き方」につながるセカンドプレイスで得られやすいと考えられる。それに対し、専業で子育て中の人は、セカンドプレイスを持っていない可能性が高く、セカンドプレイスを持たない人は達成感や評価を得る機会が少ないと考えられる。

先行研究ではセカンドプレイスを持たない人にとってのサードプレイスの特徴については明らかになっていない。子育て中の女性のアイデンティティは母親の役割だけでは支えられないとする先行研究を踏まえると、専業で子育て中の人は、サードプレイスに達成感や評価の要素を求めるのではないだろうか。そこで、次の仮説を設定した。

・専業で子育て中の人は、達成感、義務、責任などのセカンドプレイスの要素をサードプレイスに求める。
・セカンドプレイスの要素が備わっている場所が、専業で子育て中の人にとって居心地の良いサードプレイスになる。

3. 研究の方法

本研究では学校法人鷹寺学園・鷹寺福祉会子育て応援サークルを運営されている藤澤喜久子氏、および女性のサークル利用者6名(表1、表2)にインタビューにご協力いただいた。活動の様子は＊図1を参照。

【インタビュー目的】

子育て中の女性が集う居場所の特徴を運営者と利用者の語りから明らかにすること。

【インタビュー方式】

2025年10月15日、Zoomを利用して藤澤喜久子氏に約45分間のインタビューを実施した。また、サークル利用者の中から協力者を募り、2026年1月14日には女性サークル利用者6名に対し、 Zoomを利用して一人ずつ約10分間のインタビューを行った。対象者には事前に質問項目のリストをメールで送付し、回答の内容に応じて追加の質問を行った。また、回答を誘導しないように、私たちからセカンドプレイスを想起させる言葉は出さないよう気を付けた。

【データの分析方法】

インタビューの文字起こしデータから、簡潔なキーワードを付与(コーディング)して、重要な意味を持つ部分を抽出し、コード同士の階層関係を整理した。また、コードのまとまりに抽象的なコードを付けて理論化し、問いに答えられるような仮説を生成した。

語りにおける達成感の分析に際しては、土肥, 広沢, 田中(1990)※5において用いられていた就業者役割達成感の測定項目のうち、因子負荷量が65よりも高い7つの測定項目を参照した。(表2)

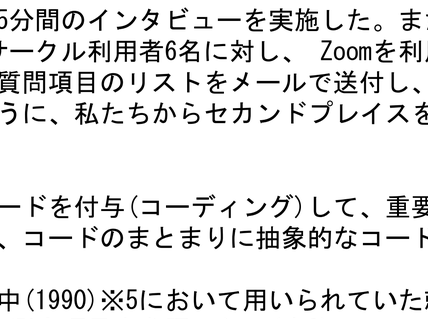
表1　インタビュー協力者詳細

	性別	利用年数	職業
Aさん	女性	8年	不明
Bさん	女性	9年	専業主婦
Cさん	女性	5,6年	専業主婦
Dさん	女性	7,8年	個人事業主(在宅)
Eさん	女性	10年	専業主婦
Fさん	女性	10年	専業主婦

表2　就業者の達成感を構成する要素
(土肥, 広沢, 田中(1990)P139に赤線を加筆)

測定項目	因子負荷量
自分の持つ能力をあらたに発見した	·75
仕事時間を楽しく過している	·75
チャレンジ精神が発揮できる	·73
社会勉強になっている	·71
一日を有効に使っている	·71
尊敬できる人がいる	·69
適度な緊張感がある	·68
気分転換ができる	·62
友人関係が広がりつつある	·61
生活水準が上がってきている	·55
寄与率	46.5%

N＝153



＊図1 行事に合わせたスイーツを作っている様子

4. 結果

〈サークル運営者・藤澤氏へのインタビューの結果〉

(サークルを始めた理由)

子育て応援をするという立場になり、子育てをする人がほっとする楽しい場所、また子育ての仲間づくりや気軽な情報交換ができる場所を作ろうと考えた。少しでも笑顔が出る活動がしたい。

(サークルの活動内容)

話すことが第一の目的ではなく、主にお菓子作りや身近なものを使った制作、館外活動などの活動を通し、自然と会話が生まれると考えている。家族の時間を生み出すことも意識し、家庭でも実践できる活動が中心である。テーマを決めて話すのがメインの日もある。また、活動終了後に利用者の方たちが残り、お茶をしながらおしゃべりをしている。

(対象にしている人)

子育てに関わっている人なら誰でも。利用者は無理のない範囲で来られるときに来ている。皆さん仲がよく、一緒に出かけることもある。

(活動頻度)

サークルは毎月行っている。毎回参加する人は固定的だが、初めての参加者も常連皆で受け入れる。

〈サークル運営者・利用者の方へのインタビューの結果〉

子育て応援サークルの利用者6名にインタビューを行った結果を以下の表にまとめた(表3,4,5)。

表3　サードプレイスの要素を満たしているか

	中立の領域	人を平等にする	会話が主な活動	利用しやすさと便宜	常連の存在	目立たない存在である	遊び心のある雰囲気	もう一つの我が家
運営者の発言		子育てをしている人なら、誰でも参加できる	活動を通して自然と会話が生まれる 活動終了後に利用者が残っておしゃべりをしている		毎回参加するひとは固定的だが、新しい利用者を皆で迎える雰囲気がある			
利用者の発言		利用者は皆友だち	会話や雑談をしに来ている 皆で喋る雰囲気が好き		最初に来た時に親切にしてくれた先輩利用者がいた			次に会うのが楽しみ また参加しようと思う

表4　サードプレイスの恩恵を得ているか

	目新しさ	人生観	心の強壮剤	ひとまとまりの友人たち
運営者の発言			ほっとする楽しい場所、笑顔が出る場所を目指している	子育ての仲間づくりができる場所にしたい
利用者の発言			楽しい 気晴らしになる	利用者は皆友だち 繋がりができる

表5　達成感の因子を満たしているか

	自分が持つ能力を新たに発見した	仕事時間を楽しく過ごしている	チャレンジ精神が発揮できる	社会勉強になっている	一日を有効に使っている	尊敬できる人がいる	適度な緊張感がある
利用者の発言			一人では、家では作ろうと思わない料理や身近なのを使った制作を行っている			親切にしてくれた先輩利用者のようになりたい	

〈その他インタビューで聞き取ったこと〉

①運営者から「子育てしている人がほっとする場所を作りたい」という目的で作られたサークルであることがわかった。利用者から「一人の大人として活動できる」「自分自身の気晴らしになる」という発言があった。

②運営者の発言から、家庭でも実践できる活動が中心であること、また利用者の発言から、利用者の多くが実際に家庭で実践していることがわかった。利用者からは「サークルの利用者同士で、子どもや家族の話をする」「病院や買い物など、普段の生活に関わる相談をする」という発言や、「サークルで作った料理を家庭でも作る」「サークルで作った飾りなどを、作ったときのことを思い出しながら家に飾る」「サークルであったことを家族に話す」という発言があった。

5.考察

〈サードプレイスの要素について〉

表3・4より、サードプレイスの要素と恩恵それぞれの半分を満たしており、この子育て応援サークルはサードプレイスの役割を果たす場所であると考えられる。

〈仮説の検証〉

表5より、表2で示した達成感の因子が一部含まれていたことから、この場所が就業者が職場で感じるような達成感を要素として含有しうることが考えられる。「チャレンジ精神が発揮できる」については4名が、「尊敬できる人がいる」については1名が言及していた。また、「活動時間が楽しい」という発言は6名全員からあったが、仕事のような目的や課題を解決する楽しさではなく、活動のプロセス自体から発生する楽しさだと解釈し、表には含めなかった。

〈インタビューから新たにわかったこと〉

結果の〈そのほかインタビューで聞き取ったこと〉より

①運営者の「子育てしている人がほっとする場所を作りたい」という発言や、利用者の「一人の大人として活動できる」「自分自身の気晴らしになる」という発言から、このサークルがただ子どもを育てたり家庭を充実させたりするのを手伝ったりするだけではなく、子育てをしている母親自身を応援する場になっていることが読み取れる。

②利用者の「サークルの利用者同士で、子どもや家族の話をする」「病院や買い物など、普段の生活に関わる相談をする」という発言から、家庭のことがサークルに持ち込まれていることがわかる。また「サークルで作った料理を家庭でも作る」「サークルで作った飾りなどを、作ったときのことを思い出しながら家に飾る」「サークルであったことを家族に話す」という発言から、サークルが家庭に影響を及ぼしている側面も見られた。子育てをしている人にとってファーストプレイスとサードプレイスは密接に関係していて、双方に影響を及ぼすのではないだろうか。

〈総合考察〉

以上のように、このサークルはオルデンバーグが挙げたサードプレイスの要素を持っていること、またセカンドプレイスの要素の一つである達成感が含まれる可能性があることが考えられる。さらに、子育てをする親がサードプレイスに求めることとして、「子育てする人自身を支援する場所である」という要素があると考えられる。また、ファーストプレイスとサードプレイスが相互に影響し合っているという現象から、子育てする親がサードプレイスに求める他の要素に起因するのではないか、という新たな仮説が導かれる。

6.課題と展望

本研究では、特定のサードプレイスの役割を持つ場所において、母親が家庭や子育てに関する会話を重視していることや、その場所での活動が家庭にも持ち込まれていることが明らかになった。今後は、子育てする親自身にフォーカスした支援による影響の考察や、ファーストプレイスからサードプレイス、サードプレイスからファーストプレイスへの影響のさらなる分析を行いたい。

一方で、セカンドプレイスを持ちながら子育てをしている母親へのインタビュー調査を行うことができなかったという課題がある。セカンドプレイスを持つ母親と持たない母親の語りを比較することで、職場を持たない母親がサードプレイスに求める役割をより深く理解できると考えられる。さらに、先行研究で指摘されている、子育て中の母親が抱きやすい自己否定感や孤立感といったネガティブな感情についても、サードプレイスの利用による変化に着目して研究を進めたい。

7.参考文献

※1菅野幸恵「母親が子どもをイヤになること: 育児における不快感情とそれに対する説明づけ」『発達心理学研究』12巻1号p12-23(2001年)
※2レイ・オルデンバーグ『サードプレイス　コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房(2013年)
※3中西友美「若い世代の母親の居場所感についての基礎研究」『臨床心理学研究』Vol.26　No.1、p87-p96(2000年)
※4百瀬良「専業母親の「個」として生きる志向一自尊感情との関連一」『家族心理学研究』第23巻 第1号、p23-p35(2009年)
※5土肥伊都子, 広沢俊宗, 田中國夫「多重な役割従事に関する研究:役割従事タイプ, 達成感と男性性、女性性の効果」『社会心理学研究』第5巻第2号(1990年)

8.謝辞

本研究では、学校法人鷹寺学園・鷹寺福祉会子育て応援サークル代表の藤澤喜久子氏および6名の利用者の皆様にインタビュー調査にご協力いただきました。また、お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科　博士前期課程　ジェンダー社会科学専攻　二俣陽香氏にはインタビュー調査の実施において研究協力をいただきました。皆様のご支援に心より感謝いたします。